

2025平和行動 in 沖縄

と き : 2025年 6月 23日(月)～24日(火)
と ころ : 沖縄県(那覇文化芸術劇場 ほか)
参 加 : 連合岐阜 6名

はじめに

戦後・被爆80年を迎える本年、連合平和4行動の先駆けとして沖縄の開催に参加した。連合岐阜からは6名、また連合三重および連合愛知からの参加を合わせ27名で行動を共にした。梅雨明けの現地の焼き付けるような日差しを浴びながらであったが、当時を呼び起こさせられる戦跡や凄惨な描写の資料の数々、慰霊碑などをめぐりただただ感情を揺さぶられた。

1. 「連合 2025 平和オキナワ集会」(6/23 那覇文化芸術劇場) ～語り継ぐ戦争の実相と運動の継続で核兵器廃絶と恒久平和を実現しよう～

開会に先立ち、第1部として「新たな安全保障を目指して」と題し、沖縄県出身の屋良朝博衆議院議員による基調講演が行われた。戦争末期の沖縄戦の歴史、そして現在も続く基地問題をとらえて、軍事に依存せず、外交や文化などを掛け合わせた新たな安全保障の形を説かれた。

そして、第2部平和式典では、冒頭、戦争犠牲者と平和をしのび全員で黙とうを捧げた。連合の清水秀行事務局長が主催者代表のあいさつを述べ、地元からは仲宗根 哲 連合沖縄会長が歓迎のあいさつに立った。後半は、連合沖縄女性委員会の堀川 恵委員長より平和アピールが提案され、万雷の拍手で確認されたのち、次回8月の平和集会の開催地である広島へと、ピースフラッグリレーが行われ、会は締めくくられた。



2. 連合ピースフィールドワーク(6/24 【C: 戦跡コース】)

2日目の現地視察学習(ピースフィールドワーク)では、連合沖縄のほか応援スタッフの方々にアテンドいただき、系数アブチラガマ、ひめゆりの塔・資料館、魂魄の塔、そして平和祈念公園・資料館といった戦跡や資料館を巡った。

中でも、系数アブチラガマは自然の洞窟状のガマは沖縄県内にいくつか点在するが、酷暑の外からは想像できないその異空間は、当時、戦火からの避難壕として想定されたが、米軍が進軍してくると、野戦壕、陣地壕としても使われることになる。それでも米軍による爆弾や焼き討ちで現地の人々が追い詰められたこと、生き残りの負傷兵で埋め尽くされたこと、担ぎ込まれても手当もできず、口に入れるものにも困り果て、折り重なるように無残に亡くなっていったこと、そうした苦悶の犠牲が払われた場所であった。爆弾が投げ込まれた空洞や当時の瓦礫の残骸など、戦時中を彷彿とさせた。ひめゆり資料館や、平和祈念資料館でもその描写が残されていた。



3. 「米軍基地の整理・縮小」と「日米地位協定の抜本見直し」を求める集会・デモ (6/23 沖縄県庁前～牧志公園)

連合清水秀行事務局長が、集会挨拶を述べたあと、各構成組織、地方連合会からの参加者一同は、沖縄の負担軽減と日米間の開かれた地位協定に向けてシュプレヒコールを上げ、国際通りを行進した。



おわりに

沖縄を訪れたのは初めてであり、まずは現地の気候や風土も印象的であったが、沖縄戦の戦史や遺跡に直に触れることができたことはこれまでの認識の改めと、戦争への忌避感にさらに影響を与えるものであった。そして、戦後80年経った今、遅々として進まない基地問題についても、沖縄の方々に今もなお過大な負担を強いているのではないかと、本土の人間として改めて問い直すきっかけとなった。たまたま立ち寄った飲食店で現地の方の思いをお伺いすることもできた。

あらゆる犠牲の礎によって築かれた現在の平和の振り返り、そして平和の尊さを噛みしめることはもとより、次代に向けて平和を継承していくことは、自分たちのせめてもの使命であり義務であると考えさせられた。こうした平和行動の機会を今後もつなげていきたい。

最後に、今回の参加にあたって、主催いただいた連合、当該の連合沖縄の皆さん、ガイドを務めていただいた関係者の皆さん、そしてともに参加させていただいた連合三重、連合愛知の皆さんに感謝を表したい。